

宍粟市・福知地区

山守れ、自治会が株式会社

モミジの名所・福知渓谷で知られる宍粟市一宮町福知地区。地元福知自治会は、福知川上流の急流を生かした小水力発電事業への参入を検討している。事業主体となる「福知水力発電株式会社」をこのほど設立。売電収入を自治会運営に役立てたい

考えた。福知渓谷は県内有数の景勝地として人気を誇った。しかし、2009年の兵庫県西・北部豪雨で同地区の家屋11棟が全半壊。渓谷も川底が削られるなどして景観が損なわれ、観光客が減少した。

水害の原因の一つに考えられたのが、山の荒廃だ。同自治会の役員らが山林整備や土木作業を担ってきたが、少子高齢化で担い手が減少。木材需要の低迷もあり、山林が放置されるようになった。

今後も山の手入れを続け、災害に強い森をつくるには、作業に報酬を出したりする必要がある。そのための資金源として着目したのが、小水力発電だった。発電量などは公募した業者の提案を受けて決める。事業費の上限は4億円で、金融機関の融資を15年で返済する計画。再生可能エネルギーの「固定価格買い取り制度」を活用し、電力会社に20年間売電する。

同自治会の前会長で、社長に就任した飯田吉則さん(59)は「地区の運営もボランティアでは続かない。売電収入を利用し、安定的に続く仕組みをつくりたい」と話した。(古根川淳也)

名勝、自然エネの宝庫



福知川の急流を利用した小水力発電事業に取り組む福知自治会の役員ら＝宍粟市一宮町福知地区

兵庫をつなぐ

兵庫県は2013年度から20年度までに、再生可能エネルギーを新たに100万戸増やすことを目標としています。14年度末で77万戸が導入されており、量的には順調と言えますが課題もある。一つは、太陽光の割合が99%と偏っており、ほかの再エネを増やす必要があること。もう一つは、資源を持つ地域自身が利益を得られる住民主導型の発電事業がまだ少ないことです。

そうした中で、小水力発電は非常に重要な意味を持っています。というのも、兵庫の多くの地域で農業用などとしてもともと管理している河川や水路を使うため、成功例が増えれば各地で普及しやすい。そして地域にとっては、忘れがちな自分たちの水資源を見直し、さらに上手に生かすことにもつながります。

県は本年度、住民主導の小水力発電の支援事業を始めました。立ち上げ段階の視察や勉強会への補助事業と、本格的な水力調査などを対象とした最大500万円の補助事業です。地域おこしの観点からも、実現につなげてもらいたい。

神戸新聞で取り上げられた宍粟市の水力発電事業の取り組みは、発電能力などで事業性が高く、地元の理解もあり、安定経営への条件が整っている。兵庫の先進事例になってもらうために、今後ともでき

小塩浩司さん
に聞きました。

兵庫県温暖化対策課長



こしお・ひろし 1960年生まれ。84年、兵庫県入庁。2011年、農政環境部環境政策課副課長。13年、淡路県民局県民交流室環境参事。15年4月から現職。

増やしたい住民主導型事業

るだけ支援していきたいと考えています。

小水力発電がもっと普及するには、水資源が地域財産であるという認識が共有されることが欠かせません。篠山の小水力コンテストや自転車の車輪を生かす小規模発電を取り上げた記事は、水の管理ノウハウの継承や資源を生かす発想を育てる上でとても意義があると思います。

小水力発電は、現状では水の落差の大きい大規模な事業の方が採算をとりやすくなっています。ですが、新しい観点で技術開発が進めば、小規模発電の形で普及しやすくなるかもしれません。水車などで水の力を使っていた記憶が地域にまだ残っている今、時代に合った形で文化を継承していけるか。地域力が試されるし、取り組んでいるうちに地域力が付いてくるのかもしれない。

(聞き手・辻本一好)